

2014.11.30 待降節第一主日

目を覚ましていなさい

マルコによる福音 13:33-37

(そのとき、イエスは弟子たちに言われた。)「気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

きょうは待降節の第一主日です。

待降節、ラテン語の「Adventus アドヴェントゥス」(英語では Advent アドベント)は主の降誕を待ち、クリスマスを準備する期間であり、典礼暦の始まりです。キリスト教の暦では今日から新しい一年が始まります。待降節とは主の降誕の4つ前の日曜日からクリスマスの前の晩までの期間です。

すでにイエスは2000年前に到来している。

また、終末、終わりの日に再び到来する。

このふたつの意味合いがアドベント、待降節にはあります。待望する。イエスの到来を二重の意味で待ち望む姿勢・人間の態度が待降節のテーマとなります。

それに関連してきょうのテキストは「目を覚ましていなさい」という到来を待ち望む、私たちの態度の問題が語られます。

その時が、いつなのかあなたがたには分からない マルコ 13:33

その時とは「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」(マルコ 13:26)時を指しています。ここのマルコ 13:26 はダニエル書の7章が下敷きとなっています。

夜の幻をなお見ていると、／見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り／「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。ダニエル 7:13-14

ダニエル書7章は、キリストの空中降臨と呼ばれることもあります。かいつまんで説明すると、いまは悪の時代で迫害されているが、その日、その時がくれば「人の子」が雲に乗ってやってきて正しい裁きをなしとげる、という救いと解放のメッセージになっています。

このダニエル書というのはけっこうな曲者で、この解釈をめぐり、聖書を文字通り信じる派、と聖書を文字通りには信じない派との別れというか、対立があります。

片方は、イエス・キリストが空から雲に乗って降りてくる、そんなのはおとぎ話だとする一派となります。もう片方は、たしかにイエス・キリストは天使の軍団を引き連れ降臨し、世を裁く、その時には天変地異がおきるのだ。それが神のご計画であり、歴史なのだ、と解釈します。

ところで、聖書の「終末」のイメージはおおきくわければ二つになります。

一つは「希望」

二つは「警告」

明るいイメージは、希望、イエスの再臨を希望として待つ、今は辛くても希望をもってしのごう、待ち望もうよ、という姿勢であり、それに関連した明るいイメージです。もう片方はちょっと暗いというか「警告」となります。再臨は必ずあるのだから、それを待つ間はこうこうしなくてはいけない、警

告ですからそうそう甘いこともいえず、厳しいことばになります。「目を覚ましていなさい」も警告に分類される終末に対する備えの態度です。

目を覚ましていなさい、マルコではこれをどのように理解し、私たちへの教えとしているのか？

ただ、いつくるか、いつくるかと空を見ている、雲にキリストが乗ってくるのを見張っているというふうには教えているのでしょうか。聖書を文字通り信じる派としては突き詰めてしまえばそのなってしまう、再臨のとき寝ているを見つけるかもしれないので、寝ちゃいけないとなります。それじゃあ、たいていの人は病気になってしまう。

目に見えるものを見張るのではなく、目には見えないけれど、確かなもの、目には見えないけれど決して滅びることのない確かなものを見張る、目を覚ましている、ここではそのような態度を奨めている教えだと思います。ありていに、ひらたくいえば、心の眼を覚ましておけ、ということになるのでしょうか。

あるいは、譬えで云えば、わたしたちの心の中でともし火はちゃんと灯っているか、ということです。イエスの到来を二つの意味（クリスマス、キリスト再臨）で待ち望んでいるか、そのことを想うと心の中でポッと火が灯るか、そのことを自分自身で確かめなさい、もし忘れていたら火を灯そうよ、そういう意味での警告になっているとわたしは思います。
